
しあわせのオレンジ

藤本金巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しあわせのオレンジ

【Nコード】

N6323Y

【作者名】

藤本金巳

【あらすじ】

猪瀬ハナ。35歳、独身。半年前に亡くなった祖母の形見のオレンジが、地味なハナを変えていく。

1話

おばあちゃんは、その朝、静かに眠っていた。

夕べはいつもと変わりなく、一緒にご飯を食べた。

私は会社のできごとを取り留めなく話し、

おばあちゃんは近所さんの日常を取り留めなく話した。

お互い、いつもの時間にはそれぞれの部屋に引き上げた。

最後に交わした言葉は、「おやすみ」。

そして、いつもの時間に起きてこないおばあちゃんの様子を見に行き、

おばあちゃんは天国へと旅立っていることを知った。

私と、この家と、【オレンジ】を残して。

おばあちゃんが亡くなってから、半年が過ぎた。

両親は不仲で、私が言葉を覚えはじめた頃には離婚したらしい。

とりあえず母が私を引き取ったけど、まもなく男と共に行方をくりました。

私は乳児院行きが決定していたけれど、救世主のごとくおばあちゃんが現れ、

以来、おばあちゃんが亡くなるまで二人暮らしを続けた。

おばあちゃんは、華奢で背が小さく、今にも折れそうな身体つきの割には、

ほとんど病氣らしい病氣をしたことがない。めったに風邪すら引かなかった。

おばあちゃんいわく、「全ての基本は食事から」らしい。

そんなわけで、私も風邪らしい風邪を引くことなく、只今元気に絶賛計算中だ。

「猪瀬さん、それ終わったらこっちの表も集計して。」

「猪瀬さん、さっきお願いした伝票だけど、15時までには仕上げてくれる?」

「いの……」

うるさい。

どいつもこいつも、そのくらい、じぶんでやれ!

……などとは申せませんので、入行15年をかけて作り上げた胡散臭いスマイルを貼り付けて、殊勝に返事を返していく。

短大を卒業後、いまちな出自の割りに地元の銀行に入行できたのは、

おばあちゃんの地元貢献度によるところが大きい。

住むところに困らないとはいえ、生活費は稼がねばならん。

あと20分で、お昼休みだ。お昼にはお弁当が待っている。

ちなみに今日のお昼は、おばあちゃんの残してくれたオレンジで作った、鶏肉のトマト煮込みだ。

2話

休憩室のレンジで温めなおしたお弁当を開ける。
美味しそくないにおい。

同期の女子は、私を残して全員寿退職していった。
後輩は外へランチに出かけるが、一緒に行くことはない。
入行したての頃は人付き合いもあって外へ行ったが、
同期が一人減り、二人減りしていくうちに、お弁当派に鞍替えした。

おばあちゃんの影響で、私も料理は苦じゃない。
二人でよく台所に立っていた。

よく、弁当を持ってくるなんてえらいね〜とか、大変だとか言われるけど、

私自身は特にそんな風に思ったことはない。

むしろ、好きなものを好きな味で食べられるので満足だ。

「お、ハナちゃん。旨そう」

同期の田中が声をかけてきた。本店に残る数少ない同期だ。

ちなみに、こいつは元カレで、同期のなかでも特にかわいい子と結婚した。

後から知ったが、二股だったらしい。

「あげないよ〜」

「ケチ」

「あーら、見目麗しい奥様にお作りいただいたら？」

「あいつ、料理が下手でさー。やっぱ、ハナちゃんと結婚すればよかった。」

再会してからずっと、こいつはこんなことをぬかす。

妻とうまくいってないのか、はたまた、おばあちゃんの遺産でお金があると踏んでいるのか。

こんな奴と付き合っていた過去をどこか遠くへ放り投げたい。

結婚した後、地方へ行つてせいせいしたのに、4月に異動してきた。しかも、私の上司だ。

どうにかスルーする。

「ところで、さっきの伝票、ミスがあつたよ。」

「え、マジ」

「付箋つけといたから、なおしといってくれる？」

「えー、ハナちゃんなおしてよ。」

「そんな権限はございませんことよ、か かり ち ょ う。」

「あいかわらず、固いよなー。」

「そういうところがお嫌いだから、よそさまとご結婚あそばされたいんでしょ？」

あんたはどつかで勝手に食べてくればいい。

これで話しは終わりと、切り上げるように食事を再開する。

私の貴重なランチタイムをあんたで無駄にする気はない。

不機嫌そうな面持ちで、外へ出て行つた田中を見て、やり込めた満足感が胸に広がった。

しかし、これが私の転機になるとは、思いもしなかった。

3話

その日を境に田中の執拗なイビリが始まった。

ちよつとミスをしうものなら、重箱を突くように叱責される。それも、ネチネチと長い。

はつきり言つて、パワハラだ。

課長は見てみぬ振りで、同僚は知らん顔。

さしもの私も疲労の色が濃くなり、食事が喉を通らない日が増えていた。

いつの間にかスカートが落ちそうなほどやつれていたらしい。

私を叱責する様子は待合から丸見えた。

おばあちゃんと仲の良かった近所の人も多く利用している。

あまりのえげつなさに店長へ苦情をいれてくれたらしいので、一旦はイビリが落ち着いたものの、ほとぼりが冷める頃には執拗さを増して再開した。

私はこいつに振られて結婚しなかったことを心から誇りに思う。

むしろ、振ってくれてよかった。ありがとう。感謝する。

「っ、聞いているのか!」

もう、答えるのも面倒だ。さつさと終わりにしてくれ。

「そんなんだから、未だに結婚できないんだよ!」

いや、それ、関係ないし。しかし、よくそんなんでお世したな。出世したから言いたい放題か？ま、どうでもいいや。早く満足しないかなー。

「相変わらず使えねえな、上も下も」

急に小さい声になったと思ったら、なんちゅー下らないセリフを吐きやがる。

あまりの寒さにトリハダ立ったぞ。

もういい、堅実な生活さようなら。無職の生活こんにちは。

「あなたが思ってるように私には祖母の遺産がありますが、微々たる物なので生活のためには働く必要があります。それが何か？」

「はあ？」

「ざっと1千万ほどここで運用していましたが、そんな微々たる資産じゃ使えませんね。お詫びに退職して資金も引き上げます。今から伝票を切りますから、ちゃっちゃと決済してください。それから今から有給休暇を消化させて頂きますのであしからず。それでは皆さん今日までお世話になりました。有難うございます。貴行の益々のご発展をご祈念申し上げます。」

それだけ一気に捲くし立てると、自席に戻って伝票を切り、休暇届けを提出した。

もちろん田中をすっ飛ばして、課長へ。

これを承諾いただけないなら、資産を全額引き上げますけどーとの脅しつきで。

実は、生前、ビルを所有していたおばあちゃんの資産は、ゼロが二つ多い。

おばあちゃんが亡くなった後、それを引き継いだ私のところには頭

取直々挨拶に来た。

働きにくくなるのでこのことは黙っているように頼んでいたが、課長の顔を見た限り資産の件を知っていると踏んだ。

しかも、役職を色々引き受けていたおばあちゃんのおかげで、結構顔が利く。

あることないこと言うつもりはないが、私が辞める理由が田中だと知れば、田中個人は営業しにくくなるだろう。同期のなかではエース級だが、ここで出世はジ・エンドだ。

・・・さあ、どうする？

課長の頭の中でソロバンを弾いている音がやみ、目で「了解」と伝えてきた。

あとの処理は全て君に任せたよ、課長君。

私は、晴れて無職の身になった。

4話

離れの戸を開ける音がした。

離れは今、幼馴染の健太郎君に貸している。

畳敷きの部屋なので、空手を教えるのにちょうどいいらしい。

「おい、ハナー。」

「開いてるよー。」

「無用心だな。」

「健ちゃんが来ると思って、空けといたんだよ。」

「それでもお前、鍵かけとけよ。」

「ハイハイ。」

ハイハイじゃねーとかなんとか、ブツブツ言いながらダイニングテーブルに座った健ちゃんにお茶をだす。健ちゃんは2つ上で、平日は親の不動産会社を手伝っている。おばあちゃんが亡くなった後の、不動産関係の手続きは全部健ちゃんがやってくれた。

おばあちゃんが亡くなるひと月前に、名義変更を頼んでいたらしい。手続き完了とほぼ同時に、おばあちゃんが亡くなった。なんか期する事があったのかな？

おばあちゃんが亡くなるまで、私はおばあちゃんがビル成金だと知らなかった。

生活は慎ましかったし、書道教室にはそれなりに生徒さんが集まっていたから、子供の頃はその収入で食べているとばかり思っていた。今考えると着物や帯はいいものばかりだったので、それに気づかない私がぼんやりしていただけなんだろう。

「それにしても、派手な辞め方したな。」

思わず、ブーっとお茶を吐いた。

「な、なんで知っているの！」

「有名だぜ、昨日の話。」

布巾でテーブルを拭きながら恥じ入る。

一晩たって考えてみたら、あまりに軽率だったことは否めない。

「お前、昔からそういうところあるよな。」

「そついうって、どういふところよ。」

「短絡的っていうか、おつちよこちよいというか。」

「……まあ、否定はしない。よくおばちゃんにも諭された。でも、辛抱したと思うよ？ 苦情が入るほどのパワハラに耐えたんだから。」

「あの、田中っていうのな、支店に飛ばされんぞ。」

「情報早っ。しかも人事の情報なのに。」

「まーなー。」

「いやー、怖いわ。情報保護も何もあつたもんじゃないわね。」

「お嬢ちゃんにはわからない、大人の世界のお話だからー。」

「何が、大人の話よ。」

「……お前、よくがんばったな。あのパワハラに。」

今、それを言うか。健太郎。不覚にも泣きたくなくなるじゃない。

お茶のお代わりを勧める振りして、台所へ逃げ込む。

ここは私の安全地帯だ。だれも簡単に踏み込ませない。

「いいにおいしてんな。」

って、おい！簡単に踏み込んでんじゃなーいっ！

「ちよつとー、台所に入らないでよ。」

「イトさんはいいつていつてくれたのに、ハナのケチ。」

「そんなこというなら、味見させてやんない。」

「ばーか、お前なんか隙だらけで、簡単に味見できるもんねー。」

言った側からオレンジを空けて、中の里芋を略奪された。

「お、イトさんの味っぽい。」

「おばあちゃんほど美味しくありませんので、今後は味見をお控えください。」

「マズイとは言ってねえ。」

「旨いとも言ってない。」

「旨い。ハナっぽい味。俺は好き。」

「今更？お世辞は結構です。おばさん達に分けようと思ってたけど、やっぱりやめる。」

噛み付く気満々で健ちゃんのを答えを待っていたら、思いがけない提案をされた。

――お前、カフェで働いてみる気ないか？

5話

――お前、カフェで働いてみる気ないか？

健ちゃんのその言葉に、胸を打ち抜かれたような気がした。

カフェ。なんでだろう、今まで考えたこともなかった。

おばあちゃんはいいい顔しなかったけど、安定した職場がよくて銀行に就職した。

おばあちゃんに育ててもらった分、家にお金を入れることしか頭になかった。

でも、でも、本音を言うと。私は調理師になりたかった。

昔から料理は好きだったし、それを仕事にできたらいいなーとは思っていた。

銀行の仕事はそれなりに楽しかったし、別に不満はなかった。週末におばあちゃんと台所に立つだけでも、十分だった。

ふと、オレンジが目に入った。おばあちゃんの大好きなル・クルーゼ。

大事に大事におばあちゃんが使っていた、オレンジ。

「やる。」

ニヤッと、健ちゃんが笑った。

ちよっと、その顔、チェシヤ猫みたいで気色悪い。

「うるせえ。」

健ちゃんに小突かれた。

健ちゃん先輩が駅前でカフェを開きたいと訪ねてきて、物件を紹介して回っているとき、

手伝ってくれる人を探していると言われたそう。

すぐに私の顔が浮かんだけれど銀行を辞めそうもないと思っていたところに、昨日の事件だ。

渡りに船とすぐ先輩に連絡したという。

っていうか、事後承諾なんだ。小峰健太郎君。それはちょっと無責任だと思うの、ハナ。

「何が、ハナ。だ。気色ワル。」

「ん？なにか言ったかな？小峰健太郎君」

「とにかく、承諾しただろ。先輩から連絡来るから、話聞けよ。」

後先考えずに辞めたし、こっちも渡りに船だったね。

健ちゃん。ありがとう。

「俺、帰るから。煮物なんかに詰めて。」

「え、持って帰るの。ずうずうしい。」

「仕事を紹介してやったのに、その言い草？」

「おじさんとおばさんの分はあるけど、健ちゃんの分はありませんー」

ん。」

「俺のことはスルー？お前、だから嫁に・・・」

「結婚して何かいいことあるのっ!？」

くそ、健太郎。いやなこと思い出させやがって。

結婚してもしなくても、最後に女は一人だっつーの。

おばあちゃんも、一人。

おかあさんも男に捨てられて、一人。

近所の一人暮らしのお年よりも、おばあちゃんが大半だ。

だいたい、私が結婚しないのは、アンタが原因だ。

さっさと帰れ。

健ちゃんの方も詰めてあったタッパーを乱暴に渡して、外に追い出す。

なにかをゴモゴモと言っていたけど、聞こえない振りをする。

いい気分も台無しだ。二度と来るな、バカ健太郎。

今度は忘れず鍵をかける。

母屋にも、自分の心にも。

6話

幼馴染が初恋なんて、テンプレすぎて考えたくもない。

しかも、かれこれ30年近くってどうなの？

35年の人生の中で、それなりに好きになった人はいる。

でも、一番やわらかいところに健ちゃんが居座っていて、他の人の入る隙間がない。

あの田中と付き合ったのは、健ちゃんを彷彿とさせる間合いだったから。

この人だったら、健ちゃんの壁を破って中へ入り込んでくれるかもしれない期待も大きかった。

それで最後まで許したけれど、ホントに最後の最後でダメだった。

どうにも受け入れられなかった。

だから同期の子と結婚するといわれても、それほどショックは受けなかった。

結局、いまだき35年経ってもバージンのまま。

健ちゃんと付き合う見込み、ゼロ。

健ちゃん以外の人とお付き合いする見込みも、ゼロ。

結婚するものにも、そこからだもんな、私の場合。
結婚なんかハードル高すぎるっちゅーの。

健ちゃんこそ、さつさとすればいいのに。
そうすれば、この街から出て行ける。

一人のゴハンは美味しくないね、おばあちゃん。

ずっと、このままなのかな。私。

美味しく出来たはずなのに、味がしない里芋を口の中で転がした。

7話

指定された場所は健ちゃんところの物件で、おじさんが送ってくれた。

かなり改装が進んでいる。オシャレな内装だ。

壁は漆喰のようなものが塗られていて、コテで盛り上げた部分が波のように見える。

テーブルは使い込まれた木の風合いがワックスで光り、それにあわせた椅子も表情がある。

すごく居心地がいい。長居したくなる。経営側には迷惑だけど。

「こんにちは、猪瀬さん？」

「はい。河合さんですか？」

「うん。今日はわざわざありがとう」

「いえ、こちらこそ。あの、言われたポトフ作ってきました。」

「お、可愛い鍋だね。ル・クルーゼだ」

「この鍋、祖母の形見なんです」

「へえ、おばあ様も料理が好きだったの？」

「じゃあ、こっちへ言いながら厨房に案内された。」

「こじんまりしているけど、使いやすそうな感じに好感がもてた。」

「オレンジを暖める。」

「前は銀行員だったんでしょ？なんで辞めたの？」

「ケンカです。」

「ケンカ？」

「元カレが上司になって嫌がらせするもんですから、最後にプチギレ。」

「ふうん。イジメるほど、君に惚れてたんだ。」

「えっ！」

「気づかなかったの！」

「・・・はい」

「そりゃ、相手が気の毒だ」

河合さんが蓋をあけ匂いを嗅ぐ。レードルでスープを掬う。

ポトフは好きで時々作るけど、人に評価してもらうのに作ったことはない。

なんだかドキドキする。

「ん。おいしい。」

詰めていた息を吐く。

「ハナちゃん、他にどんなもの作れるの？」

「えっと、どんなものを作りましょうか？」

カフェでは河合さんの作ったスイーツを出すけれど、ちょっとお腹に溜まるものも出したいらしい。

二人でメニューを考えるのは時間を忘れるほど楽しかった。

「河合さん」

今行くーと声をかけ、河合さんは私に手を差し出した。

「よろしく、ハナちゃん。僕と一緒にこのカフェを育ててください。」

「こちらこそ！」

「じゃ、また連絡します。」

「はい！」

いやー、こんなにトントン拍子に話が決まって怖いわー。

オレンジを小脇に抱えて自宅へ向かう。

猪瀬ハナ。35歳。独身。職業、カフェのシェフ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6323y/>

しあわせのオレンジ

2011年11月27日10時46分発行